
日露の史料で読み解く「ノモンハン事件」の一側面

The “Nomonhan Incident” : Some new Aspects Revealed through Russian and Japanese Historical Sources

三浦信行、ジンベルグ・ヤコブ、岩城成幸
Nobuyuki Miura, Yakov Zinberg, Shigeyuki Iwaki

Abstract:

Known as the “Battle of Khalkhin-Gol” in Russia, the Nomonhan Incident broke out 70 years ago on May 11, 1939, in the border area which separated Mongolia from Manchukuo and lasted about five months, representing an undeclared war.

In Japan it has been common to think so far that the Kwantung Army had been crushingly defeated by mechanized units of the Soviet Red Army. After the end of the Cold War, as the strict secrecy surrounding access to Soviet archives was lifted, even foreigners are being able to get a hold of historical documents pertaining to the Nomonhan Incident and revealing such crucial data as, to provide an example, total personnel losses of the Red Army. A more accurate assessment of the Soviet casualties casts a shadow of doubt on the issue of the allegedly decisive victory achieved by the Soviet Union in this border conflict. Recent estimates of Soviet losses indicate the number of 25,655 casualties, which considerably exceeds the losses suffered by the Japanese troops.

Reassessment of Nomonhan Incident is occurring in Mongolia as well, which causes a certain irritation in Russia as an undesirable revision of history.

This paper attempts to provide a brief critical review of the Nomonhan Incident by means of examining a number of Russian and Japanese historical sources.

Keywords: Nomonhan Incident, Battle of Khalkhin Gol, history revision, Post-Cold War, Mongolia
キーワード：ノモンハン事件、ハルハ河の戦い、歴史の見直し、冷戦後、モンゴル

はじめに

1939（昭和14）年、満州国の西北部の辺境・ノモンハン^{*1}（**図1**参照）で発生した満州国軍警備隊と外蒙古（モンゴル）軍の国境線をめぐる小競り合いは、同年5月には、日本・満州国対ソ連・モンゴル間の大規模な武力衝突へと発展した。その後、同年9月16日に停戦協定が成立するまでの間に、双方の戦死傷者は各々約2万人に達するなど、莫大な人的・物的損害が生じた。

宣戦布告なき局地的な限定戦（衝突）ということで、我が国では、「ノモンハン事件」と呼んでいるが、ロシア等では、戦闘が行われた地域の河の名前に因んで、「ハルヒン・ゴル河畔の事件」とか「ハルハ河会戦」と名づけている。

第二次大戦勃発の直前に起きたこの日ソ間の軍事衝突は、当時の国際情勢とも深いつながりを持っていた。しかし、「ノモンハン事件」発生時点での主要国の関心は、必ずしも高くなかった^{*2}。他方、関係当事国においても、国内報道に制限が加えられるなど^{*3}、「事件」の真相は長いあいだ伏せられていた。それ故に、ノモンハン事件は、「忘れられた戦争」^{*4}とか「知られざる戦争」とも呼ばれている。

戦後、我が国で刊行された「ノモンハン事件」関係の図書、特に戦史・戦記、従軍者の手記・日記、「事件」の戦術・敗因を分析した類^{*5}は、おびただしい数に達する^{*6}。また、小説の題材^{*7}にもなっている。関係図書をいくつか挙げると、以下のとおりである。

防衛庁防衛研修所戦史室編『関東軍 <1> 対ソ戦備・ノモンハン事件』（朝雲新聞社）、防衛省防衛研究所戦史部編『ノモンハン事件関連史料集』、D・クックス『ノモンハン—草原の日ソ戦』（朝日新聞社）、牛島康夫『ノモンハン全戦史』（自然と科学社）、シーシキン『ノモンハンの戦い』（岩波書店）、「小松原師団長ノモンハン陣中日誌」^{*8}、ノモンハン会編『ノモンハン戦場日記』（新人物往来社）、三田真弘編『七師団戦記 ノモンハンの死闘』（北海タイムス社）、五味川純平『ノモンハン』（文藝春秋）、半藤一利『ノモンハンの夏』（文藝春秋）、辻政信『ノモンハン』（亜東書房）、等々^{*9}。

このほか、「ノモンハン事件」関係文書類も、最近では、国立公文書館「アジア歴史資料センター」（JACAR）のホームページを通じてアクセスすることが可能になっている^{*10}。

こうした膨大な資料群を目にすると、「ノモンハン事件」は、既に解明しつくされたようにも見える。しかし、当時の国際情勢を踏まえた「事件」の分析、ロシア側の史料等に基づく「ノモンハン事件」の実態、激戦地での軍事考古学的調査^{*11}などは、まだまだ研究の余地が残されているようにも思われる。

これまでの「ノモンハン事件」研究史^{*12}において、1つの転機となったのは、1990年代初頭の冷戦崩壊期であった。1991（平成3）年のソ連邦崩壊と、それに続くロシアの混乱期には、それまで極秘扱いであったロシア国立軍事史料館等の文書が、次々に機密解除された。さらに、外国人に対しても門戸が開かれた。こうした機密解除の動きは、そう長くは続かなかったものの^{*13}、その間に機密解除された「ノモンハン事件」関係史料の中には、いくつもの新しい発見があった^{*14}。

冷戦崩壊期以降、モンゴルにおいても、ノモンハン事件の隠されていた側面（「モンゴルは、日ソ両国の犠牲になった」との解釈）に、光を当てようとする新たな動きが見られるようになった^{*15}。ただ、こうした「歴史見直し」の動きに対して、「強いロシア」を再び標榜するようになったロシアは、神経をとがらせ、「正義の戦いに勝利した解放者=ソ連」という従来の歴史認識を堅持しようとしている^{*16}。2009年8月26日、ウランバートルで開かれた「ノモンハン事件70周年」の記念

行事に出席したメドベージェフ大統領は、「この勝利の本質を変えるような捏造は容認しない」とくぎをさした。

2009（平成21）年は、「ノモンハン事件」の停戦からちょうど70年という節目の年に当たったこともあり、国際シンポジウム（於 ウランバートル）^{*17}や研究発表会、現地での調査、関係図書の刊行等が相次ぎ、「忘れられた戦争」に再び新たな光が当てられた。

こうした「ノモンハン事件」の客観的な分析や見直しとは別に、我が国は、この「事件」に対し、依然大きな重い課題を背負っている。「ノモンハン事件」から70年が経過したが、なお3,500体にもおよぶ戦没者の遺骨が、モンゴルの砂に埋もれたまま、激戦地に残されている。つまり戦後処理はまだ終わっていないのである。

激戦地が、モンゴルと中国の国境地帯に位置することもあって、遺族の強い要望にもかかわらず、遺骨収集が開始されるまでには、かなりの時間がかかった^{*18}。モンゴル政府の許可がおりて、遺骨収集作業が開始されたのは、2004（平成16）年であった。今年（2009年）も、厚生労働省の担当者、遺族、国士舘大学の学生を含むボランティア、計10名の遺骨収集団が、9月上旬にモンゴルに出かけて30体の遺骨を持ち帰り、千鳥ヶ淵戦没者墓苑に納めた^{*19}。

以下では、まだ研究の余地が残されていると思われるソ連崩壊期に機密解除された「ノモンハン事件」関係の史料や、それらを使って書かれた露文図書、さらには日本側史料等も参考にしながら、「ノモンハン事件」の一面（停戦直前の戦場の様子、ジューコフ司令官の実像、ソ連軍による日本語情報の収集、等）に光を当ててみたいと思う。なおその前に、「ノモンハン事件」の経過概要と最近の歴史見直しの動きにふれておくことにする。

1. 関東軍は惨敗であったのか

(1) 「ノモンハン事件」の見直し

「ノモンハン事件」は、1939（昭和14）年5月から9月までの間、地上、空中で激戦が続いたが、ノモンハン周辺の主戦場は、**図2**のとおりである。通常、「ノモンハン事件」は、1939年5月末までの「第一次ノモンハン事件」と、6月20日以降、8月のソ連側の総攻撃を経て、9月中旬の停戦協定調印に至るまでの「第二次ノモンハン事件」の二つ時期に分けられる^{*20}（詳しくは、巻末の**表「ノモンハン事件」の経過**を参照）。

これまで我が国では、「ノモンハン事件」は、ソ連機甲部隊に対する関東軍の惨敗、ないしは「悲劇的な大敗北」というのが通説であった。「負けてはいない」^{*21}とか「勝ったとは言切れないが、決して負けてはいない。やられっぱなしの時に停戦となり残念だった」^{*22}といった捉え方は、あくまで少数意見であった。こうしたことから、高校の日本史教科書においても、「ソ連の大戦軍軍団の前に大打撃を受けた」^{*23}とか、「ノモンハン事件では、ソ連軍の機械化部隊の前に日本側は8700人もの戦死者を出し、一個師団が壊滅するという大損害をこうむった」^{*24}といった表現になっている。

ところが、近年、こうしたとらえ方に疑問が呈されるようになった。日本軍は決して惨敗したのではなく、むしろ兵力、武器、補給の面で圧倒的優位に立っていたソ連軍に対して、ねばり強く勇敢に戦った。勝ってはいなくても、「ソ連軍の圧倒的・一方的勝利であったとは断定できない」と

の見解が示されるようになった^{*25}。中には、さらに進めて「日本軍はむしろ勝っていた」という論さえも現われた^{*26}。

(2) 日ソの戦死傷者数の比較

ノモンハンの戦闘において、日本軍が互角、いやそれ以上に善戦したことの根拠としてしばしば挙げられるのが、日本側と比較した際のソ連側の戦死・戦傷者数である。ソ連は、従来、イデオロギー的な宣伝などもあり、日本側の死傷者数を大きく膨らませる一方で、自国の人的被害や損害を、故意に小さく見せようとしてきた。

ところが、冷戦崩壊期の機密文書解禁によって、信用できそうな数値が、ロシアでも公表されるようになった。その結果、以前の主張は崩れ、ソ連軍の戦死・戦傷者数は、従来の公式発表よりも、ずっと多いことが明らかになった。

よく引用されるのは、1991（平成3）年に東京で開かれた「ノモンハン・ハルハ河戦争国際学術シンポジウム」での、ロシア国防省戦史研究所のワルターノフ大佐の報告（戦死傷者1万8,815人 < 戦死・行方不明者3,435人、戦傷者1万5,286人、捕虜94人 >）^{*27}や、1993年にロシアで出版されたG. F. クリヴォーシェフ監修本（『秘区分解除：戦争、軍事行動及び武力紛争におけるソ連軍の損害』の中の「1939年ハルハ河畔の日本侵略者の粉碎（壊滅）」の章）に掲げられているソ連軍の人的被害（2万3,926名 [戦死及び行方不明者7,974名 <内訳：戦死者6,831名、行方不明者1,143名>、戦傷者1万5,251名、戦病者701名]）^{*28}である。

ソ連軍の戦死傷者数は、刊行年の新しい図書ほどその数が多くなっている。例えばクリヴォーシェフ監修本でも、2001年に刊行された『20世紀の戦争におけるロシアとソ連邦』においては、ノモンハンの戦いにおけるソ連軍の死傷者数は2万5,655名（戦死及び行方不明者9,703名 <内訳：戦死者7,624名、行方不明者2,028名、その他51名>、戦傷者1万5,251名、戦病者701名）となっている。1993年のクリヴォーシェフ監修本と比べてみると、戦傷者と戦病者数には変動はないが、戦死・行方不明数は1,729名の増（内訳は、戦死者793名増、行方不明者885名増、その他51名増）となっている^{*29}。

日本側の死傷者数について、ロシアは、日本側が公表している数値よりもはるかに多い人数をあげている。例えば、1939年11月15日に、ソ連第1軍集団参謀部が労農赤軍参謀総長シャポーニコフに提出した「1939年ハルハ河地区作戦に関する報告書」によれば、7月と8月の戦闘だけで、日本軍の死傷者数は、4万4,768名（戦死者1万8,868名、負傷者2万5,900名）^{*30}にも達したとしている。

また、1946年に刊行されたシーシキン大佐の本（『1939年のハルハ河畔における赤軍の戦闘行動』）は、「5月から9月までの日・満軍の損失の総計は5万2,000から5万5,000に達し、そのうち、死者だけで2万5,000人をくだらなかった」^{*31}と記述している。1993年のクリヴォーシェフ監修本でも、「軍事作戦期間中の戦死者数だけで、約2万5,000人に及んだ」^{*32}となっている。

このほか、ソ連軍中央国家文書館（ЦГАКА）のある文書^{*33}は、「戦死者1万8,300人、戦傷者3,500人、捕虜566人（このうち88名は捕虜交換された）、遺体引渡し6,281体」という数値をあげると同時に、「1939年10月3日に、陸軍当局は戦死傷者数が1万8,000人であることを認めた」と付け加えている。

我が国では、第六軍軍医部調整の第二次ノモンハン事件（第一次ノモンハン事件や安岡支隊、航

空部隊の損傷は含まず)の数値が引用されることが多い。戦死及び不明8,717名、戦傷8,647名、戦病2,350名、合計1万9,714名である^{*34}。これに第一次ノモンハン事件等の人的損害を加えたとしても、そう大きな数字にはならないと言われる。

ところで、1966(昭和41)年10月3日付の『朝日新聞』に、「ノモンハン事件慰霊祭」という小さな記事が掲載された。この中に、「昭和14年、ソ満国境で起きたノモンハン事件戦没者1万8千余人の慰霊祭が、・・・靖国神社で行われた。」^{*35}との記述がある。この1万8,000余人という数値は、戦死傷者と戦没者を混同したものではないかと見られる。

1万8,000人という数値は、ソ連軍中央国家文書館の文書(前述)の中にも登場するが、これは、「事件」終了直後に日本陸軍が公表した死傷者数が、出所ではないかと思われる。「ノモンハン事件」の停戦から半月程たった1939(昭和14)年10月4日付の『東京朝日新聞』(夕刊)^{*36}は、1面トップで、「陸軍・ノモンハン事件説明」との見出しをつけて、前日3日に、陸軍が、地方長官会議の席上で行った「ノモンハン付近の戦況」説明を報じている。この記事の中に、「ちなみに去る5月ノモンハン事件発生以来停戦に至るまでの我軍の損害は死傷及び戦病者を加えて約1万8千名である。」^{*37}との記述がある。

初めて明らかにされた犠牲者数に、朝日新聞の社説は、厳秘にふせられた事実を、軍当局が公表したことに深甚の敬意を表しつつも、同時に、「初めて公表されたる犠牲者の意外に多数に上っている事実に対して、同情を禁じえない」^{*38}としている。

(3) もし日本が、・・・

戦死傷者数が相手方よりも少なかったからといって、勝利したとは言えないであろう。戦争を始めたそもそもの理由・目的は何であったのか、また、最終的に、その目的を達成することができたのかどうか、といった点も重要である。「ノモンハン事件」の場合、最終的には、ほぼソ連側が主張していた国境線(ハルハ河から満州国側に約13～20キロ入った線。一部国境線については、停戦間際の駆け込み攻勢で、日本側が押し戻しはしてはいるが)に近い形で決着している。

また、ソ連は、緊迫度が増しつつある欧州情勢に対処するために、ぜがひでも背後の安全を確保しておきたかった(挟み撃ちとなる東西二正面での戦いは避ける)。そうした中で、「ノモンハン事件」を通じて日本に手痛い打撃を与え、ソ連の実力を見せつけ、ソ連の狙い(ソ連と敵対する「北進」を断念させること)を完遂することができた、とも言えそうである。一方日本は、「ノモンハン事件」の苦い経験により、ある種のトラウマが生じてしまい、結局、二年後には、「北進」から「南進」へと転換を図っていくことになる^{*39}。

欧米の学者の中には、もし日本が「北進」論を放棄していなかったならば、世界史の流れは、大きく変わっていただろうと述べる者もいる^{*40}。また、「ノモンハン事件」(ハルハ河の戦い)に少佐として参戦し、戦後は一転して反体制派となったピョートル・グリゴレンコも、その回想録の中で、「もし日本がドイツ側について参戦したならば、われわれは終わりだ」^{*41}と語った作戦参謀の話を紹介している。

2. 9月の戦闘状況と関東軍の新攻勢準備

以下では、9月の戦闘状況と兵士達の様子等を見ていくことにする。

(1) 作戦終結命令と関東軍

8月20日からのソ連軍の大攻勢がなお続いていた8月23日、ソ連は突如、独ソ不可侵条約を締結し、日本だけでなく、世界を仰天させた。9月1日には、ドイツがポーランドに侵攻したことから、ドイツと密約（ポーランド分割）を結んでいたソ連は、できるだけ速やかに、日本との戦闘（「ノモンハン事件」）に終止符を打ちたいと考えていた。

日本の軍部が、ドイツの仲介を通じて「ノモンハン事件」の停戦を模索していることを既につかんでいたソ連は^{*42}、8月22日に、ロフフスキー外務次官が、東郷茂徳大使に、日本側から具体的な申し出があれば、ソ連側は停戦について研究する用意がある旨、伝えた。ソ連が外交交渉による「事件」の解決を望んでいることを知った外務省は、機を逸せず交渉を開始するよう東郷大使に訓令した^{*43}。

当時、ドイツ外相リッペンロップと会談したスターリンは、ドイツが日ソ間の問題を調整するために、貢献してくれることは考慮するが、「それがソ連の発意であるという印象を日本に与えることは好まない」^{*44}と述べている。つまりソ連の公式見解は、あくまでも「日本側の願望に基づき軍事作戦は中止し、・・・」なのである。

ソ連軍の8月大攻勢によって大打撃を被った関東軍は、第2師団、第4師団、速砲部隊、野戦重砲兵第5連隊等を、中国戦線からノモンハンに投入する措置をとった。また大本営も、強がり終始してきた関東軍が突如、兵力増強の希望を出してきたことから、「事件」の容易ならざることをようやくつかみ、8月29日に、第5師団、第14師団、飛行第59戦隊、臨時編成速射砲中隊、兵站自動車等の転用や動員派遣を内定した^{*45}。

関東軍は、一連の戦力増強を図った上で、9月10日頃にソ連軍に対し、反撃攻勢をしかける計画を立てていた^{*46}。しかし、欧州情勢の激変にともない、大本営は、一転して「ノモンハン事件」の打ち切りを決断する。

まず8月30日に、関東軍に対し、作戦終結の命令（大陸命第343号）を下した。しかし、この命令の中には、かなり婉曲な表現（「関東軍司令官ハ、「ノモンハン」方面ニ於テ勉メテ小ナル兵力ヲ以テ持久ヲ策スヘシ」）も含まれていたことから、伝達に赴いた参謀次長の中島鉄蔵中将が、関東軍側に取り込まれてしまい、大命の趣旨は、反撃攻勢まで封じるものではないとの言質を与えてしまう^{*47}。あわてた参謀本部は、9月3日に改めて明確な形で、ノモンハン方面におけるすべての作戦の中止と、戦場外地域への撤退を命じた（大陸命第349号）。

それでもなお、関東軍は、戦場に放置されたままになっている遺体等を收容する（戦場掃除）という名目での小規模な作戦の実行許可を参謀本部に求め続けた^{*48}。もし、認めないのであれば、関東軍司令官以下を罷免せよとの強硬な意見具申も行った。しかし、許可はおりず、関東軍はようやく9月6日に、作戦中止の命令を下达した。

(2) 9月の戦闘状況とノモンハンの兵士達

ただ、作戦中止命令によって、戦闘が完全に終了したわけではなかった。9月6日に植田関東軍司令官が最後^{*49}に発した「関東軍命令」の中には、「一、大命ニ依リ「ノモンハン」方面ニ於ケル攻

勢作戦ヲ中止セシメラル」の後に、「三、航空兵团ハ依然前任務ヲ続行スヘシ」*50という文言が含まれていた。地上戦での主力による攻勢の中止は命じたものの、受動自衛の戦闘までは否定していなかった。また、ハンダガヤ方面の要域を確保するための作戦は、認めていた*51。飛行集団によるソ連基地攻撃等は、9月15日まで続けられた。

限定的ながらも戦闘が継続された理由は、再び交戦する用意があることをソ連側に示すことによって、停戦交渉のテーブルに、ソ連をしっかりとつかせる狙いがあったものとみられる*52。

9月に入ってからの航空戦は、まず9月1日と5日に大きな空中戦が、さらに14日と15日には、ソ連の飛行場や航空基地群に対する攻撃が行われた。9月1日の空中戦では、日ソ約300機が1時間にわたり熾烈な交戦を展開した。9月6日以降は、雨が降り続くなど天候が悪化したことに加え、航空兵团の再編強化（中国からの新たな航空兵团の移駐と戦力の増強）が行われたことから、10日間ほどは、偵察飛行や哨戒飛行といった限定的な作戦しか取られなかった*53。

停戦間際の15日に敢行されたソ連軍航空基地攻撃には、制空権の奪取を図ろうとする狙いも込められており、ソ連側の意表をつく形で行われた*54。しかしこの最後の攻撃の際に、ノモンハン航空戦の撃墜王と呼ばれていた第11戦隊の島田健二大尉が戦死するなど*55、日本側の損害も少なくなかった。なお、ソ連軍基地では、既に9月12日に、スムシュケービッチ兵団長が率いる20人以上のベテラン・パイロットが、モスクワに帰還していた。帰還の目的は、来るべきソ連のポーランド侵攻に備えるためであったと言われる*56。

飛行第11戦隊第2中隊付きでノモンハンの航空戦に参戦した瀧山和中尉は、次のように回想している。「9月15日停戦になったときの感想は、『やっと生き残ったな』というのが偽らざる心境であり、この後期の航空戦は負けであったと思った。」*57

地上においても、ハンダガヤ方面で、なお激戦が続いていた*58。9月1日にノモンハンの戦場に到着した第2師団歩兵第16連隊（連隊長・宮崎繁三郎大佐）の2個大隊は、9月8日に夜襲により997高地（ソ連側の呼称は、「エリス・オーリン・オポー」高地）、秋山高地、東山高地に攻撃をしかけ、守備するソ連軍と激戦になるが、9日早朝には、攻略に成功する。その後、出撃してきたソ連戦車との戦闘は、日没まで続いたが、なんとかもちこたえた。この戦闘の際に、第2大隊長の尾山助太少佐、機関銃中隊長の浅井公輔大尉を含む150名が戦死した*59。

9月11日には、独立守備歩兵第16大隊（深野時之助中佐指揮）が、1031高地（「三角山」。ソ連側の呼称は「マナ山」）の攻略に成功している。

この二つの地点での戦闘結果は、後の国境線画定交渉の際に、日本側に有利に働くことになる（約500平方キロが満州国領となる）。なお、地上戦は、9月13日の衝突をもって終了する*60。

ハンダガヤ周辺等を除くノモンハンの戦場では、敵の偵察機が番犬さながらに飛び回ったり、敵の砲弾が砂丘と砂丘の間に落下して、「破れ太鼓」を打つような音がこだまする*61ことはあったものの、8月31日以降の戦況は、おおむね平穏であった。このことは、次のような兵士の戦場日記からも読み取ることができる。

◎「9月8日 起床六時、今日も一日異常なく、15時頃友軍爆撃及戦闘機約30機、我が上空を飛来した。その後すぐ、アブが50機（注：ずんぐりした形状から、日本側は、ソ連のI-16型戦闘機を「アブ」と呼んでいた。）ほど編隊で飛来したが、何もせず帰っていった。夜も静かで、

内地の晩秋を思い出す。』*62（「青山五郎の陣中日記」野戦重砲兵軍曹・青山五郎）

◎「9月14日 ドラム缶に湯を沸かす。二十日振りに戦陣の垢を洗い落す。其の心地よさ。我ながら人間生れ変りたるが如く清々し。』*63（「歩 27 連隊旗手・中津川七良の日記」）

◎「9月14日（木）電 午前中水汲みに行く。イ 16 三機飛来し射撃す。電が降り顔を打つ。地面も白銀と化す。封書来り、葉書出す。』*64（「従軍手帳」歩兵一等兵・井上重也）

◎「9月15日 金 晴 七時めしが来て起床したら、日本晴の好天気だ、寒さは身に沁みて晩秋をおもわせる。八時集合して小隊長のお話あり、いよいよ総攻撃だという感強い。少し休んだのち野球をした。紙をまるめて靴下で包んだのを球としてやる。実に愉快なもので、11 対 11 で引分となり終わった。午後、新聞がきた。欧州の様子もおだやかでないらしい。火砲の手入れをして休む。』*65（「初年兵の書いた戦場日記」一等兵・長野哲三）

(3) 関東軍の新攻勢準備とソ連軍

新鋭師団が、ようやくノモンハンの戦場にそろい始めた9月2日に、植田謙吉・関東軍司令官は、全軍の士気を鼓舞するために、次のような訓示をおこなった。

「今次会戦ハ、従来ノ国境紛争ト全く其ノ趣ヲ異ニシ、之カ勝敗ハ、懸テ国運ノ盛衰ニ重大ナル関係ヲ有スルモノニシテ、実ニ日蘇ノ一大決戦トモ謂ウヘキナリ。

皇国内外多事ナルノ秋、將兵ハ益々減私奉公ノ大義ニ徹シ、愈々必勝ノ信念ヲ鞏クシ、萬難ヲ克服シ、勇戦奮闘暴戻不遜ナル蘇蒙軍ヲ撃滅シ、以テ皇軍ノ威武ヲ内外ニ宣揚センコトヲ期スヘシ」*66。

9月4日には、荻洲第六軍司令官が、「各兵団・・・乃至三昼夜ニ亘ル夜間ノ機動、潜入、潜伏及爆破ノ要領等ヲ演練スヘシ・・・」*67との訓令を發した。さらに、総攻撃を明日に控えた9月9日には、荻洲司令官が全軍に対して布告を發した。これを聞いたある兵士は、これを「死の布告」と名づけ、その内容を次のように書きとめている。

「・・・不利なる情況のもと、わが軍はよく戦った。しかしこのままの態勢では、戦死された将兵にたいし、まことに申し訳ない。この戦いは一小事件にすぎざるも、その戦闘内容においては事実上、日ソの決戦である。わが軍はここに最新鋭武器を動員して総攻撃を行ない、敵に一大鉄ツイを加えんとす。全軍將兵の奮闘を祈る」*68。

ところが、総攻撃が予定されていた9月10日は雨となり、陸空一体での総攻撃には不向きという理由で、13日に延期された。13日もまた雨で、再び延期された。なお、第一線の將兵たちに、公式に攻勢作戦の中止が伝えられたのは、9月12日の兵団長会議の席上であったという*69。

日本軍が9月上旬に、大規模な反転攻勢に出る可能性は、実際問題としては、かなり小さかったと思われる（植田関東軍司令官の訓示の翌日9月3日には、既に述べたように、参謀本部より、作戦中止命令が發せられている）。しかし、戦場の日本軍兵士は、戦場の雰囲気微妙な変化を感じつつも、来るべき決戦に向け覚悟を新たにしていた。また、ソ連軍指揮官たちも、「迫り来る」関東軍の攻勢に、いかに対処するかに注意を集中させていた。

以下に紹介するシュテルン前線集団司令官の1939年9月14日付の暗号電報（原文は巻末参照）も、

報復に燃える関東軍の具体的な増強の様子を述べた後、戦闘の継続を予測して、戦闘機や飛行士の増派を中央に求めている。ただ、9月14日という日付は、停戦協定調印のまさに前夜であった。

この暗号電報が、ノモンハンでソ連軍を指揮していたグリーゴリー・シュテルン二等軍司令官（この称号は、1936年にシュテルンに与えられたものであるが、当時の赤軍では、二番目の重みのある称号であった）から、国防人民委員（現在の国防相に当たる）クレメント・ヴォロシーロフに直接送られたという点に注目する必要がある。

シュテルンは、1937年から1938年までスペイン共和国軍司令部主席軍事顧問を務めたあと、1938年5月には、極東戦線参謀長に任命された。さらに、1939年には、極東戦線軍の指揮を担当することになる。なおシュテルンは、1938年に、ハサン湖付近で起きた日ソの軍事衝突（「張鼓峯事件」）では、途中からブリュッヘルにかわってソ連軍の指揮をとった。

極秘（複製禁止）第3部

6日間に後で労働赤軍参謀本部第8課第4係に返却のこと

暗号電報 第25743 ~ 25750号

1939年9月13日22時20分送信、1939年9月13日23時03分受信
国防人民委員部暗号課 1939年9月14日2時入電

ヴォロシーロフ同志 殿

満州との国境における戦闘状況に関する多くの情報を総合すると、日本人は、最近の壊滅に対する報復を、いかなる代償を払ってでも行なうことを決め、近いうちに、(ソ連)軍集団を殲滅するという確固たる目的を持って、大攻勢をかける準備をすすめている、とみなすことができる。既に、4~5を下らない師団が集結している。すなわち第2師団、第4師団。第23師団と第7師団は現在補充され、現状復帰しつつある。また第9師団、朝鮮からの大兵団、騎兵旅団、同じく新しい満州国軍部隊の急派について、確認を必要とする情報がある。増強された多くの部隊、特殊部隊、非常に多くの砲（ハルビンからの情報によれば、一千基近い様々な砲）、戦車（9月10日に、150台がハイラルから南に通過した）、集められる限りの全ての飛行機（500機近い）が結集しつつある。この結集は、主に第1軍、第2軍及びザバイカル軍管区と対峙している日本軍の戦力を、弱体化させることによって進行している。

今後、他のより重大な決定がなされないのであれば（日本人の満州における全般的戦略状況は、まったく不利なものであると我々は考えている）、我々の主要課題は、日本人による第1軍集団への攻撃を成功させず、攻撃集団を撃破することである。第1軍の人的損失は、既に大部分補充済みである。部分的には、物的面においても。ジューコフのところには、火炎放射戦車1個大隊（25X.Vより）を派遣する。

ハルハ河東岸において、確固たる防禦線を配置するための全ての対策は講じた。しかし、上記の課題を遂行するためには、確実な保障を考えなくてはならない。特に、これまでの戦闘地域外で、

の日本人が作戦行動を行う場合に備えて、以下の措置が必須である。

1. 第1軍集団を強化するために、第94師団及び第37戦車旅団を派遣すること。その中から砲兵大隊1個と戦車大隊1個を持った狙撃連隊を、タムツァク・ブラーク地区のジューコフの予備隊に配置する。残りの部隊は、ヴァイン・トゥメンの戦線予備隊に配置する。9月15日に進撃準備が完了する先頭戦車大隊は、移動を早め、燃料と走行距離を節約するために、キャタピラをはずして走行する。先頭の連隊は、9月16日に攻撃の準備ができる。第94師団及び第37戦車旅団は、防寒テントを備えて進軍する。作戦終了後、第94師団及び第37戦車旅団は、ザバイカル軍管区に戻る。

2. 作戦に要すると予想される時間、緊迫度、さらには通常戦闘機が大量に使用不能となる状況を考慮したうえで、可能な限り短期間に、現在派遣途上にあるものに、さらに50機のI-16型機（機銃4挺装備）の補充を要求する。ジューコフの部隊では、目下、約300機のI-16型機とI-153型機が活動している。しかし、ザバイカル軍管区には、I-16型機とI-153型機が全くない。派遣途上にあるのは、わずか48機のI-16型機にすぎないことを考慮されたし。緊迫した戦闘を行なう上で、地上戦闘員を（空から）援護するには、これではあまりに少ない。

3. 必要な場合、我々の裁量で、ザバイカル軍管区、また第1軍、第2軍から、ジューコフ部隊に補充の戦闘機パイロットを暫定的に派遣することを、許可していただきたい。なぜならば、スムシケービッチ・グループが出発した後は、第1軍集団には、予備の戦闘機パイロットは残っていない。指示を頼む。

第735号 シュテルン、ビリュコフ*

暗号解読 1939年9月14日11時40分、解読者 アファナーシェフ

7部印刷

第1部 参謀本部第8課

第2部 ヴォロシーロフ同志

第3部 シャーポシニコフ同志

第4部 労農赤軍政治局

第5部 国防人民委員部

第6部 国防人民委員部

第7部 国防人民委員部

第8部 —

(注) *ビリュコフは、シュテルンの副官

(4) シュテルンとジューコフ

上記の暗号電報を打電した前線集団司令官シュテルン（1900-1941年）と電文中にも登場するジューコフ（1896-1974年）について、少しふれておきたい。

シュテルンは、1939年8月29日に、第1軍集団司令官のジューコフとともに、ハルハ河の戦い（「ノモンハン事件」）における軍功により、「ソ連邦英雄」の称号を受けた。しかし、それから2年余り後の1941年10月28日には、国家反逆罪に問われ、41歳の若さで銃殺されてしまう（1954年には名誉回復がなされた）。同じ日に、ノモンハンで飛行兵団長を務め、レーニン勲章と「ソ連邦英雄」称号を、それぞれ2回受賞したベテラン・パイロットのスムシケーヴィチ（ユダヤ系）も銃殺されている。

1936年から1938年にかけての「大粛清」では、ユダヤ系を含むさまざまな民族出身の軍司令官が粛清された。ユダヤ系の人物をあげれば、レニングラード軍管区司令官ヨナ・ヤキール1等軍司令官、

モスクワ軍管区軍副司令官ボリス・フェリドマン兵団長、みずから命を絶った労農赤軍政治指導本部長のヤン・ガマルニク1等軍政治委員などである。

なお、スターリンの政治方針がナチスドイツへの接近に変わった1939年以降、状況は変化した（ユダヤ系への圧力が強まった）と推察される。注目されるのは、1930年以来外務人民委員（外相）のポストにあったユダヤ系のマクシム・リトヴィノフ（ヴァレフ）が1939年5月に突然解任され、ヴェチェスラフ・モロトフ（スクリヤービン）が新たに外相となったことである。1934年以来駐独ソ連大使のポストにあったヤコフ・スリツは、1937年にフランス大使に転任したが、ナチスドイツのフランス占領に伴ってその職を解かれた。また、ソ連対外諜報の草分けで、1934年のソ連内務省創設後「特務班」（SGON:「ヤーシャ班」として知られる）の指揮をとったヤコフ・セレヴリヤンスキーも、1939年末に逮捕されている。

シュテルンが「肅清」された後、「ハルハ河の戦い」におけるソ連の勝利は、もっぱらジューコフの功績によるところが大きいという筋書きになってしまう。シュテルンがリトワニア出身のユダヤ人であったことや、シュテルンとジューコフの確執^{*70}、さらには、ジューコフが、国防人民委員ヴォロシーロフに近い立場を利用して、本来の命令系統とは別ルートでモスクワと連絡を取り、ライバルを蹴落としていったことなども取りざたされている^{*71}。

なお、歴史学者のヴァレイリー・ヴァルタノフ教授は、歴史ドキュメンタリー「ハルビン・ゴール: 知られざる戦争」（ヴァジム・ガサーノフ監督制作、2004年）の中で、シュテルンの部下であったジューコフが、中央と直接に連絡をとる権限を獲得したのは、1939年7月19日の国防人民委員部の指令によってである、と述べている^{*72}。

ジューコフは、ソ連軍の8月大攻勢の際にも、無慈悲なやり方で作戦を強行したと言われる。つまり、彼は、人命の犠牲の上に立ってこそ、軍事目標は達成されとの考えに立っていたので、兵士の命を惜しむようなことは一度もなかったと言われる^{*73}。こうしたことも、ジューコフ批判に結びついているようである。

前にも少しふれたピートル・グリゴレンコは、シュテルン司令官と部下であるジューコフとの不仲の一因は、ジューコフが命令違反という理由で、おびただしい数の兵士の銃殺を決めたが、それをシュテルン司令官が却下してしまったことにあるのではないかと見ている^{*74}。ジューコフの部下たちには、たえず、ごく些細なミスを犯しただけでも、銃殺刑に処せられるのではないかと恐怖がつきまとっていたという。

元参謀本部大佐（ノモンハン事件当時は、後方支援部隊長であった）の V. A. ノヴォブラネツ（1904-1984年）も、雑誌『戦史公文書』^{*75}の2004年第5号（「6. ハルビンゴール」の章）の中で、次のようなジューコフ批判を展開している。

ノモンハンにおいて、ソ連が日本に勝てたのは、ひとえに戦車と大砲の数が圧倒的に優勢であった（数の面での優位）からにすぎない。決して戦闘能力が優れていたというわけではない。死傷者数も莫大であった。悲劇的なノモンハンの経験から、まじめな結論を導き出すことが必要であった。しかし、ジューコフはそのことを認めようとはせず、自分の都合の良いように情報をねじ曲げてしまった。

日本人に勝てたのは、シュテルンのお陰でもあった。シュテルンは、ジューコフの部隊運営上の数々の誤りを正した。しかし、それがやがて彼の死へと繋がっていった。シュテルン司令官は、ノ

モンハン事件の「苦い経験」から積極的に教訓を学ぼうとして、報告書の作成を命じた。生の声を盛り込んで作成された貴重な戦闘報告書は、印刷して各部隊の司令官に配布されることになっていた。しかし、印刷の直前に、参謀本部長に新しく就任したジューコフは、それを握りつぶしてしまった。ジューコフ自身は、自分に都合の良い自画自賛の内容を本^{*76}にして出版した。

ノモンハン事件の苦い経験（準備不足、参謀本部の指導の誤りや失策）が生かされなかったために、ソ連は、1939年11月のフィンランドとの冬戦争において、さらには独ソ戦においても、再び同じ過ちを繰り返すことになり、多大なる犠牲者を出した、と V. A. ノヴォブラネツは回想している^{*77}。

3. ソ連軍による戦場での日本語情報の収集

日ソの違いは、情報収集の面にも現れていた。ソ連軍は、日本軍や満州国軍の捕虜に対して様々な尋問^{*78}を行っただけでなく、戦場に横たわる戦死者からも、手紙やメモ、作戦命令等の各種文書の類^{*79}を積極的に収集することによって、日本軍の作戦等を把握しようとした。武官としてソ連に駐在した経験もあり、ロシア語も堪能であった小松原師団長は、そうした事実を、耳を傾けていたロシア語放送からつかんでいたようである。

小松原師団長の日記には、次のような記述がみられる。

「八月三日 晴 大暑 敵側ノラジオ放送 四、日本軍捕虜及戦死者ノ所持品ヨリ、関東軍命令（6.20, 1532号）、廿三師団命令（6.30, 105号）、儀峨中将ノ靴ヲ取得ス」^{*80}

日本軍将兵は、諸外国の兵士たちに比べ、戦場においても実にこまめに、手帳等に日記やメモをつけていたようである。収集されたこれらの日本語情報は、ロシア語に翻訳され活用された後、公文書館に保存された。ただ、もとの日本語原文は、一部を除き、ほとんど残されていないようである。以下では二つの露文史料を紹介する。

(1) 第六軍司令官の訓示

1つ目は、1939（昭和14）年8月4日に新たに編成された第六軍の司令官・荻洲立兵中将の訓示である。具体的日付は書かれていないが、小松原師団長の日記によると、訓示は8月15日に行なわれたようである。なお、荻洲司令官は、8月13日に初めてノモンハンの戦場を視察し、小松原師団長らと顔合わせをしている。

訓示は、おそらく口頭でなされ、印刷されたもの（紙）はなかったと想像される。しかし、ソ連側に訓示内容の露訳が残っているところから見ると、なんらかの理由で、内容を記した紙（訓示内容を部下に伝えるために、将校が書き取ったメモの類か、あるいは、訓示内容を書き取った兵士のメモがあったのかもしれない）が、ソ連軍の手に入ったということであろう。

この訓示は、9月5日の訓示（後述）に比べると、それほど気負ったところは感じられない。第六軍編成の大命を受けたことに対する感謝と喜びを述べた後、優勢なる敵に対し、小松原中将が指揮する第23師団は、よく奮戦したとしている。さらに、敵の執拗なる攻撃が依然として続いているため、「事件」は長期化の様相を呈しており、今後の予測は困難である。この未曾有の困難に直面し、将兵たちは骨身を惜しまず、満州国の信頼に応え、課せられた義務を遂行することを希望すると結んでいる（ここでの訳文は、カタカナ書き・旧カナ遣いではなく、現代かな遣いにしてある^{*81}）。

.....

荻洲立兵・第六軍司令官の八月の訓示

1939年8月〇日

新たに第六軍を編組する命令を受け取った際、我々はそれを、軍を統率する大命として受けとめ、うやうやしく頭をたれた。このことに関する我々の喜びは、まさにつきるところがない。

最近、満蒙国境で紛争が生じた際、第23師団の全部隊は、小松原中将指揮の下、少数の兵力によって、優勢なる敵兵力を圧倒した。猛勇なる士気により、国境防禦という最も重要な任務を果たしながら、執拗なる敵に対し、再三にわたり激しい攻撃をしかけた。これは我々の無限の喜びとするところである。しかしながら、敵は依然として、力づくの軍事攻撃によって我々を苦しめており、紛争は長期化の様相を呈している。

現在のところ、「事件」の今後を予測することは困難である。迅速かつ断固たる措置が、偉大なる皇軍と皇国の今後の発展のために、非常に重要な意味を持っている。これらの措置において、最も重要な役割を果たすのは、国防の第一線に立つ将兵である。将兵の主要なる任務、それは今の紛争を解決することである。

我軍の将兵は、この未曾有の困難な時に、自分たちに課せられた義務の重要性をしっかりと理解し、記憶しなければならない。骨身を惜しまず、昼夜を分かたず、大命を遂行しなくてはならない。気持ちを強く持ち、我軍の団結と訓練を確保するために、無数の困難を克服し、この紛争解決に向けてあえて前進することは、今後の作戦に向けて周到なる準備となる。

こうすることで、我々はおのれの義務を果たし、日本と満州国の防衛同盟を強化することができる。友好国満州国の信頼にみごとに応えることを期待する。

第六軍司令官 荻洲立兵*

(出所) ЦАГА . Ф. 32113. Оп . 1. Л. 232. Л. 362.

(注) *原文では、「オギス・リッポウ」となっている。

.....

ノモンハンでの戦闘が続いている最中に、関東軍と第23師団の中間に、第六軍司令部を設けたことについては、当時、「屋上屋を重ねるもの」との批判があった。また、第六軍の参謀のほとんどが、ノモンハンの地形や気象に馴染みがなく、さらには対ソ作戦にも携わった経験がなかったことから^{*82}、これまで以上の適切な対ソ作戦指揮ができるのか疑問、との声も少なくなかった。

第六軍の編成から暫くたってから、ようやくノモンハンの戦況視察に現れた新司令官の一面を、歩兵団長は次のように書きしるしている。

「午後二時、新任第六軍司令官荻洲立兵中将着任。第一線を巡視され戦闘指令所にこれを迎え、約三十分。休息所にて酒を催促せられちょっと面くらえり、・・・」^{*83}。

新任司令官は、無類の酒好きで、ウイスキーが手放せなかったようであるが^{*84}、激戦が続いている中だけに、その評価は厳しいものとならざるをえなかったのであろう。

ソ連軍は、別の日の荻洲司令官の訓示も、何らかの方法で入手していたようである。こちらは、停戦の1週間ほど前の9月5日に行った激励の訓示である。この訓示に接した日のことを、ある兵士は、

日記に次のように記している。

「5日ももっぱら夜襲のための諸準備に費やされ、きたるべき決戦を前に、部隊全員に戦勝酒が分配された。極めて少量ではあったが意気大いに上がった。この日軍司令官荻洲立兵中将よりの訓示が伝達された。」^{*85}

9月5日のこの訓示は、極東国際軍事裁判（東京裁判）の折に、ソ連側検察官によって、日本のソ連に対する侵略行為を示す有力な証拠の1つとして、提出された。ソ連のスミルノフ検察官は、訓示の中の二つの文章、すなわち、「軍は満蒙国境における混乱した戦闘の渦巻の中に、巻き込まれた」と、「すでに単なる国境上の衝突事件を凌駕している」とを特に取り上げて、荻洲証人を追求した。これに対し、荻洲証人は、「・・・9月6日に停戦すべき大命を受けましたので、その前日たる5日にはそういう訓示を出すべき機会はなかったと存じます」^{*86}と答え、訓示の存在自体を否定した。

訓示の内容は、小松原師団長の日記によれば、次のようなものであったという（東京裁判の判決文中の引用は、現代文であり、内容も以下のものとは少し異なる^{*87}）。

「曩ニ第六軍ノ編組ヲ令セラレ、図ラスモ立兵乏シキヲ以テ西北地区防衛ノ大任ヲ拝ス、寔ニ恐懼感激ノ至リニ絶ヘス、爾来、匆匆ニシテ満蒙国境紛争ノ渦中ニ投シ、次イテ直接戦線ニオケル戦闘指揮ヲ、継承旬日余ニシテ今日ニ至ル。

思フニ、事態ハ既ニ単純ナル国境紛争ノ域ヲ脱セリ、対支聖戦遂行ノ途上而モ暗澹タル内外政局ノ下、今事変ノ推移ハ正ニ国家ノ大事ニ属ス。

而シテ軍カスノ如キ難局ニ方リ、対処スヘキ途ハ唯一ナリ、即チ全軍全鉄ノ団結ヲ結成シテ、速カニ敵ニ鉄槌の一撃ヲ加ヘ、以テ彼ノ暴戾不遜ノ増長ヲ粉碎スルコト之ナリ。

今ヤ軍ノ戦備ハ着々トシテ、国境鼠賊ノ蠢動ヲ一挙ニ封殺シ、皇軍ノ精鋭ヲ世界ニ誇示スヘキ秋ニ会ス。将兵ハ、自重克ク事態ノ重大性ニ対スル認識ヲ、深刻ナラシムルト共ニ、上下一貫志気旺盛ニシテ、韌強ナル攻撃精神ト必勝ノ信念トヲ堅持シ、随所ニ敵ヲ圧倒殲滅シテ、皇軍ノ威武ヲ宣揚シ、以テ大元帥陛下ノ新倚ニ応ヘ下全軍ノ期待ニ副ハンコトヲ聊力決意ヲ披瀝シテ訓示ト為ス」^{*88}（文中の句読点は、引用者が挿入）

「東京裁判」の多数判決は、ノモンハン事件の日本の作戦行動は、単なる国境事件ではなく、侵略戦争であると認定したが、少数派の裁判官であったオランダ代表ローリング判事は、これに反対して次のように述べた。

「ほとんど四カ月の戦闘の後に、すなわち停戦の一週間前に、司令官は次の如く述べたことを示している。『西北地域の防備の大きな使命実現が失敗に帰した事を残念ながら認めなければならない』この言明から、事件が侵略を帯びていたと結論することは、全く困難である。この文書には、失敗の理由すなわち準備が不十分であったことも挙げられている」^{*89}

(2) 第七師団兵士への手紙

2つ目の史料は、手紙である。兵士が身につけていた家族からの手紙や遺書、さらには、作戦指令書の類^{*90}も、ソ連軍は戦場から収集していた。

以下に紹介するのは、北海道（旭川）からノモンハンに派遣された第7師団のある兵士（コバヤシ氏）に宛てた（事業家・ヒラツカ氏の）手紙である。第7師団は「最強の師団」とも言われ、兵士の多くは、北海道開拓に携わった屯田兵の末裔であった。しかし、ノモンハンに派遣された1万618人の

将兵のうち、その32.8%にあたる3,481人が戦死傷するなど^{*91}、その人的損害はきわめて大きかった。

第7師団の歩兵第26連隊（6月20日に、第23師団配属となる。連隊長・須見新一郎大佐）の激闘は、昭和38年に、「七師団戦記・ノモンハンの死闘」というタイトルで、『北海タイムス』に長期連載され、大きな話題となった^{*92}（後に、単行本としても出版された）。また、第7師団の将兵の味わった過酷な体験は、伊藤桂一の小説『静かなノモンハン』の中にも鮮やかに描かれている。

連隊長の須見新一郎大佐は、ノモンハン事件に当初より参戦し、無事に生還できた数少ない歩兵連隊長であった。しかし、「事件」後は予備役に編入されてしまった。

この手紙は、兵士の体を気づかうとともに、ノモンハンでの航空戦の成果や日ソ漁業問題等に触れた後、自身に課せられた任務を、「天皇の赤子」として立派に果たすことを希望している。さらに、家族が「恩賜のたばこ」を賜ったことや、新聞、手紙を送ること等も述べられている。内地からの手紙や新聞・雑誌、慰問袋のことは、ノモンハンの戦場日記の中にも、よく登場する。新聞を通じて、戦場の兵士たちは、独ソ不可侵条約等の欧州情勢もいち早く知っていたようである^{*93}。

当時、手紙、新聞には厳しい検閲が行なわれていたが、この手紙がどうであったのかは不明である。手紙が投函された日付は書かれていないが、文中の第7師団長の名前が、園部中将となっているところを見ると、8月1日以前ではないかと思われる。師団長は、8月1日付で、園部和一郎中将から国崎登中将に替わっている。

.....

貴 殿

以前と同じように、対ソ戦において、自分の責務を果たしていることと存じます。成功を望みません。最近、ソ満国境における衝突にともない、ソ連と日本の間で「事件」が起きたことと、オホーツク海における漁場問題について、お伝えすることができます。これに伴い、日ソ外交関係は今日、著しく悪化しています。

そのみならず、最近、ノモンハンでのソ蒙軍による国境侵犯により、衝突が起きました。彼等は、大きな損害を被りました。とりわけ空中戦においてそうでした。短期間にソ連の航空隊は、40～50機を失いました。まさにこれにより、我軍は、ソ連に対して、また我が国に敵対しているイギリス、フランス、アメリカに対しても、我々の第一級の将兵の能力を示しました。

上に述べたことを要約すると、次のように述べる必要があります。我が国には、現在、すばらしい未来が開けており、我が国民は、勇士たちの英雄的功績により、元気づけられています。敵との戦いに成功することを、心より祈ります。今、日本が自分の前に据えた目的を達成する好機が到来した、とみなすことができます。

自分の健康に留意し、自身に課せられた任務をみごとに遂行するために、全力をつくすようお願いいたします。あなたは、園部中将指揮下の第七師団の勇者に相応しいように努力しなくてはなりません。

問題は、目的を達成することだけではありません。旭川から満州に派遣された後、第七師団が、暑さ、寒さ、その他の辛苦と闘いながら困難な道を歩んできたことを、粗野なロシア人たちに示す必要があります。

最近、あなたの家族は、あなたに対する天皇からの贈り物、すなわち恩賜のタバコを賜りました。

近いうちに、彼等はあなたにそれを送るでしょう。焦らずにあなたの手紙を待ちます。今後あなたは、自分自身のものでも、父親のものでもなく、ただ天皇ひとりのものであることを、覚えておいて下さい。このことを考え、健康に注意して下さい。成功を祈ります。近日中に、新聞と手紙を送ります。ご健康で。

ヒラツカ*

(出所) ЦАГА Ф. 32113. Оп. 1. Д. 230. Л. 118.

(注)*ヒラツカ氏は、事業家であるという。

おわりに

「ノモンハン事件」に関しては、今なお、事件の発端をはじめとして、日本、ロシア、モンゴルの間で、様々な認識のギャップが認められる。こうした中であって、モンゴルのイニシアチブで始められた国際シンポジウムは、「ノモンハン事件」の共通認識の形成と誤った認識の是正に、少なからず貢献してきたと言われている^{*94}。

90年代初頭の冷戦崩壊期に大きく進んだロシアの「歴史見直し」も、今日、再び逆戻りの懸念が広がっているし、一時大きく開いたロシア公文書館の扉も、また閉ざされようとしている。こうした時代にあっても、長期的視点に立って国際的な学術研究協力やシンポジウムを積み上げて行くことが、歴史の共通認識形成の早道となるのではないだろうか。

* 本稿は、アジア・日本研究センターの平成 21 年度研究プロジェクト「ポスト冷戦期におけるノモンハン事件の見直し」(代表・三浦信行)の研究成果の一部をとりまとめたものである。

- * 1 「ノモンハン」というのは、本来は地名や村名ではなく、チベット仏教(ラマ教)の高僧位階を示すものであるという。「ノモンハン」(法王)という名のついた「ブルド・オポー」(土地の神霊がやどるとされる石を積み上げた塚で、旅人が旅の安全を念じて供え物をする)を示しているという(田中克彦編訳『ノモンハンの戦い』岩波現代文庫、2006年、p. vii)。
- * 2 D. クックス、高橋久志訳「外国人が見たノモンハン戦の教訓」『歴史と人物』(増刊)、1984年12月、p. 332。: Edward J. Drea, *Nomonhan : Japanese-Soviet Tactical Combat, 1939*. (Leavenworth papers No. 2) U. S. Combat Studies Institute, 1981. <<http://www-cgsc.army-mil/carl/resources/csi/drea2/drea2.asp#I-1>> p. 3.
- * 3 小林英夫『ノモンハン事件－機密文書「検閲月報」が明かす虚実』平凡社新書、2009年。
- * 4 Amnon Sella, "Khalkhin-Gol: The Forgotten War." *Journal of Contemporary History*, Vol. 18, No. 4, 1983. pp. 651-687.
- * 5 三野正洋、大山正『ノモンハン事件 日本陸軍「失敗の連鎖」の研究』ワック、2001年。
- * 6 「ノモンハン事件」関係の文献目録には、下河邊宏満「ノモンハン事件 関係文献目録」『軍事史学』No. 128, 1997年3月、pp. 60-71。; 「ノモンハン事件」『近代戦争史図書目録45/95』日外アソシエーツ、1996年、pp. 304-307。; 「ノモンハン事件」『読書案内 大事件を知る本』日外アソシエーツ、1997年、pp. 178-183。などがある。
- * 7 例えば、村上春樹『ネジまき鳥クロニクル』第1部「泥棒かささぎ編」の中の「間宮中尉の長い話」新潮文庫; 伊藤桂一『静かなノモンハン』講談社文庫など。村上春樹氏のノモンハン訪問記としては、『辺境・近境』新潮文庫がある。
- * 8 『歴史と人物』(増刊)1984年12月所収。日記の原文(5月10日～11月1日。一部、記述を白紙で覆っているようにも見える部分がある。)は、「小松原將軍日記(第23師団)」というタイトルで、防衛研修所戦史部編『ノモンハン事件 関連史料集』の中に収録されている。

- * 9 戦前に刊行されたものとしては、財団法人忠霊顕彰会編『ノモンハン美談録』満州図書株式会社、昭和17年のほか、入江徳郎『ホロンバイルの荒鷲』鱗書房、昭和16年；草葉榮『ノロ高地』鱗書房、昭和16年；高島正雄『バルシャガル草原』鱗書房、昭和17年などがある。
- * 10 国立公文書館「アジア歴史資料センター」のホームページ <<http://www.jacar.go.jp>> 参照。
- * 11 辻田文雄「ノモンハン事件の軍事考古学的考察」軍事史学会第149回定例研究会（平成21年9月26日）での報告。「ノモンハン事件70年」『朝日新聞』2009年6月8日；“Lessons not learned from Nomonhan Incident.” *International Herald Tribune*, July 18-19, 2009. p. 23.
- * 12 「ノモンハン事件」研究の歴史については、A. クックス、高橋久志訳「外国人が見たノモンハン戦の教訓」『歴史と人物』（増刊）1984年12月、pp. 333-334. を参照。
- * 13 「ノモンハン、70年後の教訓 <下> スターリンの呪縛」『産経新聞』2009年10月11日。
- * 14 ロシア軍事史料館の史料を踏まえた図書には、鎌倉英也『ノモンハン 隠された「戦争」』日本放送出版協会、2001年がある。
- * 15 田中克彦『ノモンハン戦争 モンゴルと満州国』岩波新書、2009年。
- * 16 「大戦70年 露、歴史見直し拒否」『産経新聞』2009年8月28日。
- * 17 例えば、関口グローバル研究会、モンゴル国文書管理局等の主催のもと、2009年7月3日～4日に、モンゴルの首都・ウランバートルで、「世界史の中のノモンハン事件－過去を知り、未来を語る」というシンポジウムが開かれた。この国際シンポジウムの報告内容（要旨）については、次のサイトを参照 <<http://aisf.or.jp/sgra/info/MongolSympo2009Abstracts.pdf>>。
- * 18 ノモンハンの遺骨収集問題については、『第159回国会衆議院厚生労働委員会議録』第2号、平成16年2月27日、p. 14; 小山矩子『ノモンハンは忘れられていなかった』文芸社、2007年を参照。
- * 19 「遺骨収集：「ノモンハン事件」旧日本兵、無念だったろう」『毎日新聞』2009年10月8日。2004年以降、これまでに持ち帰った遺骨総数は、今回の30体を含めて111体である。
- * 20 関東軍参謀部第一課「ノモンハン事件 機密作戦日誌別紙」『現代史資料（10）日中戦争（三）』みすず書房、1964年、p. 72.
- * 21 釜賀一夫「負けてはいないノモンハン」『ノモンハン会報』No. 52、2002年3月1日、p. 25.
- * 22 阿部武彦「ソ連戦車に対する射撃訓練の体験」『ノモンハン会報』No. 43、1997年9月1日、p. 21.
- * 23 『詳説日本史』山川出版社、2009年、p. 335.
- * 24 『日本史B』東京書籍、2009年、p. 339.
- * 25 「“ノモンハン” は日本軍の一方面的敗北ではない」三代史研究会『明治・大正・昭和30の“真実”』文春新書、2003年、pp. 122-126.; 名越健郎『クレムリン秘密文書は語る－闇の日ソ関係史』中央公論社、1994年、中公新書1207、p. 195.
- * 26 小田洋太郎、田端元『ノモンハン事件の真相と戦果－ソ連軍撃破の記録』有朋書院、2002年。
- * 27 ノモンハン・ハルハ河戦争国際学術シンポジウム実行委員会編『ノモンハン・ハルハ河戦争』原書房、1992年、p. 160.
- * 28 Г. Ф. Кривошеев ред., *Гриф секретности снят: потери вооруженных сил СССР в войнах боевых действиях и военных конфликтах*. Москва, 1993. с. 84-85.; G. F. Krivosheev ed., *Soviet Casualties and Combat Losses in the Twentieth Century*. Greenhill Books, London, 1997. pp. 56-57. なお、日本語抄訳は、前掲『ノモンハン事件 関連史料集』pp. 686-689. に収録されている。
- * 29 «Разгром японских захватчиков у реки Халхин-Гол (1939 г.)» Г. Ф. Кривошеев ред., *Россия и СССР в войнах XX века. статистическое исследование*. Москва, 2001. с. 179.
- * 30 前掲 防衛研究所戦史部編『ノモンハン事件 関連史料集』p. 634.
- * 31 シーシキン他、田中克彦編訳『ノモンハンの戦い』岩波現代文庫、岩波書店、2006年、p. 84.
- * 32 Г. Ф. Кривошеев ред. (1993) *указ. соч.*, с. 78.
- * 33 ЦГАСА. Ф 33387. Оп. 3. Д 1207. Л. 117,118.
- * 34 前掲『関東軍 <1> 対ソ戦備・ノモンハン事件』p. 713.
- * 35 「ノモンハン事件慰霊祭」『朝日新聞』1966年10月3日、p. 14.
- * 36 「陸軍・ノモンハン事件説明、我戦死傷病一萬八千」『東京朝日新聞』1939年10月4日 夕刊
- * 37 死傷者約1万8千人の出所が、朝日新聞であることを、ソ連の作家 K・シモーノフは、その著書の中で述べている (K. Симонов. «Далеко на востоке» *Собрание сочинений том десятый*. Москва, 1985, С. 44)。

- * 38 「ノモンハン事件の説明」『東京朝日新聞』1939年10月4日、夕刊、p. 3.
- * 39 ベレジコフ「私はスターリンの通訳だった」『諸君』1982年9月、pp. 91-92. ; Jonathan Haslam, *The Soviet Union and the Threat from the East, 1933-41*. London, 1992. pp. 132-133. ; John Colvin, *Nomonhan*. Quartet Books, London, 1999. p. 188.
- * 40 D・クックス、高橋久志、立川京一訳「ノモンハン事件再考」『軍事史学』No. 128、1997年3月、p. 12.
- * 41 P. G. Grigorenko, *Memoirs*. trsl. by T. P. Whitney. N. Y., 1982. p. 132.
- * 42 日本国際政治学会太平洋戦争原因研究部編『太平洋戦争への道、開戦外交史 ④日中戦争 <下>』朝日新聞社、1963年、p. 109.
- * 43 外務省欧亚局第一課編『日「ソ」交渉史』巖南堂書店、1969年、p. 520. ; Hubertus Lupke, *Japans Rußlandpolitik von 1939 bis 1941*. Berlin, 1962. S. 15.
- * 44 米國務省編『大戦の秘録－独外務省の機密文書より』読売新聞社、1948年、p. 98. ; E. Катасонова. «Развязать большую войну Япония не готова...» группа Р. Зорге и конфликт на Халхин-Голе. <http://ei1918.ru/soviet_union/print/ravjazat_bol_shuju.html> c. 6.
- * 45 前掲 防衛研究所戦史部編『ノモンハン事件関連史料集』pp. 336-337.
- * 46 前掲 辻政信「ノモンハン」pp. 215-219. ; 「とむらい合戦準備」読売新聞社編『昭和史の天皇』29巻、読売新聞社、1976年、pp. 345-347.
- * 47 「特使、真意伝えず」前掲『昭和史の天皇』29巻、p. 354.
- * 48 「戦場掃除も許さず」前掲『昭和史の天皇』29巻、pp. 359-361.
- * 49 9月7日には、「ノモンハン事件」の責任を明らかにする形で関東軍首脳の変更が行われた。
- * 50 前掲『現代史資料 (10) 日中戦争 (三)』p. 147.
- * 51 前掲『関東軍 <1> 対ソ戦備・ノモンハン事件』p. 723.
- * 52 アルヴィン・クックス、岩崎俊夫、吉本晋一郎訳『ノモンハン④ 教訓は生きなかった』朝日文庫、1994年、p. 18.
- * 53 同上 p. 11.
- * 54 源田孝「ノモンハン事件における空戦経緯」『満州事変から支那事変へ』偕行社、2009年、p. 144. ; В. Кондратьев, *Битва над степью: авиация в советско-японском вооруженном конфликте на реке Халхин-гол*. Москва, 2008. с. 58.
- * 55 “The China and Nomonhan Incidents.” Henry Sakaida, *Japanese Army Air Force Aces 1937-45*. Osprey Publishing, 1997, p. 17.
- * 56 Кондратьев, *указ. соч.*, с. 58.
- * 57 瀧山和「戦闘機パイロットが語るノモンハン事件」『軍事史学』128号、1997年3月、p. 47.
- * 58 「明暗のノモンハン戦秘史 (下) 宮崎連隊と深野大隊の勇戦」秦郁彦『昭和史の謎を追う上』文藝春秋、1999年、pp. 241-242, 244-246.
- * 59 この戦闘に関するソ連側の記述は、日本のものとは異なっており、ソ連軍が2度にわたり攻撃をしかけてきた日本軍を撃退したことになる (前掲、シーキン他『ノモンハンの戦い』pp. 82-83.)。
- * 60 マクシム・コロミーエツ、小松徳仁訳『ノモンハン戦車戦』大日本絵画、2005年、p. 121.
- * 61 前掲 三田真弘編『七師団戦記 ノモンハンの死闘』p. 410.
- * 62 ノモンハン会編『ノモンハン戦場日記』新人物往来社、1994年、p. 250.
- * 63 同上 p. 348.
- * 64 同上 p. 124.
- * 65 同上 p. 233.
- * 66 前掲 防衛研究所戦史部編『ノモンハン事件関連史料集』pp. 350-351.
- * 67 前掲「小松原將軍日記 (第23師団)」『ノモンハン事件関連史料集』p. 458.
- * 68 前掲『七師団戦記 ノモンハンの死闘』p. 412.
- * 69 前掲「小松原將軍日記 (第23師団)」『ノモンハン事件関連史料集』p. 476.
- * 70 平井友義「ソ連史料からみたノモンハン事件」『歴史と人物』(増刊) 1983年1月、p. 389.
- * 71 二木博史「国際シンポジウム「ハルハ河戦争－その歴史的真實の探求」について」『日本モンゴル学会紀要』No. 25、1994年、p. 83. ; 前掲『ノモンハン④ 教訓は生きなかった』p. 212.
- * 72 Яков Зинберг. «Кто это Фекленко?» <<http://berkovich-zametki.com/2009/Zametki/Nomer14/Zinberg1.php>>

- * 73 前掲『日本モンゴル学会紀要』No. 25, p. 83.
- * 74 P. G. Grigorenko. *op. cit.*, pp. 108-109.; 前掲 コロミーエツ『ノモンハン戦車戦』p. 44.
- * 75 В. А. Новобранец, “Записки военного разведчика.” «Военно-исторический архив» Vol. 53, No. 5, 2004, с. 104-110.
- * 76 ジューコフ、清川勇吉ほか訳「第7章 ハルハ川（ノモンハン）の宣戦なき戦争」『ジューコフ元帥回想録』朝日新聞社、1970年、pp. 117-134.
- * 77 В. А. Новобранец. *указ. соч.*, с. 107-108.; 「ノモンハン事件、元ソ連参謀本部大佐手記詳訳」『産経新聞』2004年9月2日。なお、P・グリゴレンコも、ジューコフによる報告書捏造について言及している (P. G. Grigorenko. *op. cit.*, p. 110.)。
- * 78 捕虜となったミヤジマ飛行士、タグチ飛行士等に対する尋問調査については、以下を参照。
В. Кондратьев. *Указ. соч.*, с. 125-128.
- * 79 小松原師団長の7月28日の日記には、「七月三日ノ戦闘ニ於て我軍、師団及飛行集団ノ作戦命令ガ敵手ニ陥り我軍ノ編組ガ判明セシコト」との記述がある（「小松原將軍日記（第23師団）」『ノモンハン事件関連史料集』p. 432.）。
- * 80 同上、p. 436. この儀峨中將は、儀峨撤二・第2飛行集団長を指すものと思われる。
- * 81 原文は、「茲ニ新ニ第六軍編組ヲ命ゼラレ、立兵乏シキヲ以テ軍統率大命ヲ拜ス、誠ニ恐惧感激ニ堪ヘス。・・・」のような文体であったと思われる。
- * 82 「地理知らぬ幕僚」前掲『昭和史の天皇』第28巻、p. 324.
- * 83 同上
- * 84 辻政信の『ノモンハン』の中には、次のような描写がある。「軍司令官室に申告にいった。ウキスキーで大分酔が廻ってゐるらしい。心の苦しさを酒でまぎらわさねばならなかったのだろう。」「ウキスキーで赤い顔の軍司令官に對し、・・・」（pp. 208, 211）
- * 85 「石坂准尉の八年戦争（ノモンハンの戦い）」
<<http://www.geocities.jp/fujimoto-yasuhisa/isizaka/honbun/st12.htm>>
- * 86 「224號 昭和22年5月26日」『極東国際軍事裁判速記録』第5巻、1968年、雄松堂、p. 524.
- * 87 判決文の引用には、次のような文がある。「第六軍の再編成・・・発せられたにもかかわらず、その指令が遂行されなかったために、西北地域の防衛の大きな使命実現が失敗に帰した事を残念ながら茲に認めなければならない。我軍は・・・」（「三、ソ連に対する侵略」朝日新聞法廷記者団『東京裁判』下巻、東京裁判刊行会、1962年、pp. 87-88.）。
- * 88 前掲 防衛研究所戦史部編『ノモンハン事件関連史料集』p. 459.
- * 89 「ローリング判事の意見書 ノモンハン事件」朝日新聞法廷記者団『東京裁判』下巻、東京裁判刊行会、1962年、p. 276.
- * 90 ソ連軍は、8月23日14時付けの小松原師団長の抵抗作戦指令書も戦場で収集していた（前掲 鎌倉英也『ノモンハン隠された「戦争」』、p. 201.）。
- * 91 前掲『関東軍 <1> 対ソ戦備・ノモンハン事件』p. 713.
- * 92 星亮一『遙かなるノモンハン』光人社、2004年、p. 160.; 単行本は、三田真弘編『七師団戦記 ノモンハンの死闘』北海タイムス社である。
- * 93 大木繁『ノモンハン参戦日記』金剛出版、1975年、p. 78.
- * 94 田中克彦「2009年ウランバートル・シンポジウムを終えて」2009年10月7日。
<http://www.aisf.or.jp/sgra/active/news/post_349.php>

表 「ノモンハン事件」の経過（1939（昭和14）年5月11日～9月17日）

第一次ノモンハン事件	4月25日	・植田謙吉・関東軍司令官、「満ソ国境紛争処理要綱」に基づく作戦命令第1488号を發出。
	5月11日	・外蒙古軍の小部隊が、ハルハ河を越えて侵入、満州国軍警備隊これを攻撃し、撃退。
	13日	・ハイラル（海拉爾）駐屯の第23師団（師団長・小松原道太郎中将）、搜索隊を基幹とする東支隊（東八百蔵中佐指揮、歩兵2個中隊）を派遣。
	15日	・モンゴル軍がハルハ河西岸に撤退したため、東支隊はハイラルへ撤収。
	20日	・ソ連・モンゴル軍、東支隊が引き揚げた後のハルハ河東岸に進出し、陣地を構築。
	22日	・戦闘機による最初の空戦発生。
	25日	・ソ連、ジューコフのノモンハン派遣を決定。
	28日	・歩兵第64連隊長山県武光大佐の指揮する山県支隊、川又（ホルステン河とハルハ河の合流点）付近を攻撃。
	29日	・第23師団東搜索隊、川又付近で孤立し、全滅（東八百蔵中佐戦死）。
	30日	・ソ連、緒戦での敗戦の経験から、欧州航空兵力のノモンハン転用を決定。
	31日	・山県支隊、ハイラルへ撤収。
6月5日	・関東軍、出動していた航空部隊の帰還を命令。	
第二次ノモンハン事件	6月14日	・日本軍、天津の英仏租界封鎖を断行。
	15日	・ソ連軍、地上部隊を集結させるとともに、航空機による攻撃を開始。
	16日	・独外相、大島駐独大使に対し、独ソ不可侵条約締結を明言。
	16～18日	・ソ連、ハルハ河兩岸にて兵力を増強。
	19日	・ソ連、アルシャン、甘珠爾廟を爆撃。
	20日	・関東軍、地上部隊に応急派兵を命令。
	24日	・参謀本部、次長名で、関東軍に作戦（越境爆撃）の自発的中止を求める。
	25日	・ソ連軍、將軍廟を爆撃。
	27日	・午前、第2飛行集団100機にて、タムスク、マタト、サムベースの爆撃を決行。
	30日	・第23師団に攻撃命令下達。
	7月2日	・第23師団による左岸攻撃と、安岡支隊による右岸攻撃が始まる。戦車第4連隊（玉田美郎大佐）、バイシャガル高地に対し夜襲を敢行する。
	3日	・第23歩兵団、左岸攻撃のため、ハルハ河を渡る。ソ連軍機甲部隊と遭遇。白銀査干（バイン・ツァガン）でも戦闘。第23師団参謀長大内孜大佐戦死。激しい航空戦始まる。
	5日	・日本軍、ハルハ河左岸より撤退し、橋梁を爆破。
	7日	・第23師団、夜襲を開始。
	10日	・井置搜索隊、フイ高地を占領。安岡支隊の編組を解く。第1戦車団は、駐屯地に帰還。
	16日	・ソ連軍、チチハル西方のフラルキの鉄道橋を爆撃。
	18日	・野戦重砲部隊、前線に到着。五相会議、日ソ戦争への発展を極力防止することと、「事件」を外交交渉により解決することを確認。
	7月中旬	・ソ連、200機の戦闘機を補充し、戦力の増強を図る。パイロットも続々と送り込む。
	20日	・参謀本部、関東軍に対し、「ノモンハン」事件処理要綱（「事件」を局地に限定し、越境航空攻撃は行わない、遅くとも冬季までに「事件」が終結するよう努める）を示達。なお、万一に備え、内地から重砲部隊を増派。
23日	・午前、ソ連戦闘機100機が来襲、乱戦となる。午後も、延べ138機来襲。	
23～24日	・砲兵によるハルハ河右岸への攻撃を開始するも、圧倒的に優勢なソ連軍兵力の前に失敗。	
25日	・関東軍、決戦から持久防禦の態勢に、作戦を変更。	
26日	・ソ連軍陣地に対する組織的な集中砲撃終了。	
29日	・アライ飛行場がソ連機の襲撃を受け、10機炎上。午後、60機にて出撃、ソ連軍機と交戦	

第二次ノモンハン事件	8月2日 3日 10日 12日 8月中旬 19日 20日 21日 22日 23日 24日 25日 26日 27日 28日 29日 30日 20～31日	<ul style="list-style-type: none"> ・飛行第15戦隊基地、ソ連機50機の襲撃を受け、5機が地上で炎上。戦隊長安倍大佐戦死。 ・日本軍、各部隊の拠点に築城工事の実施を命令。 ・満州国の西方正面防衛を担当する第6軍（司令官・荻洲立兵中将、参謀長・藤本鉄熊小将）が編成され、第23師団のほか、第7師団、第5師団がその隷下に入る。 ・第6軍司令官、荻洲立兵中将ハイラルに着任。 ・雨が激しく、1週間あまり、航空隊の作戦は中止。 ・第64戦隊の基地がソ連機の夜間爆撃を受け、2機炎上。関東軍の増強兵力いまだ到着せず。 ・ソ連軍の総攻撃始まる。約500機による航空攻撃により、日本軍は守勢に陥る。ソ連の航空機攻撃は午後も続き、防御陣地は大きな被害を受ける。 ・第2次タムスク進攻爆撃（タムスク飛行場、フイ高地のソ連地上軍等を連続攻撃）。空中戦は最大の激戦となる。 ・ロゾフスキー外務次官、東郷駐ソ大使に対し、停戦交渉検討の可能性につき言及。 ・関東軍、第7師団にハイラル進出を下命。第71連隊第3大隊、三角山で全滅。 ・独ソ不可侵条約締結。包囲された地上部隊の支援に、戦闘機が5回あまり出撃するも、ソ連軍の機甲部隊の進撃を阻止することはできず。 ・第6軍、攻勢を開始するも、大きな損害を受ける。準備不足もあって、第6軍と航空部隊の作戦協力は十分でなかった。 ・フイ高地（721メートル、ソ連側の呼称は「パイレーツ高地」）の井置支隊、陣地を離脱。731高地の歩兵第26連隊、生田大隊、全滅。 ・関東軍、東満州駐留の第2師団の応急派兵を決定。日本軍の攻勢は失敗。作戦は事実上中止となる。戦闘機の絶対的な不足から、関東軍は、旧式機をノモンハンに投入。 ・ノロ高地の長谷部支隊、撤退を開始。小松原師団長、バルシャガル高地（746メートル、ソ連側の呼称は、「レミゾフ高地」）の救援に出撃。 ・ジューコフ、勝利宣言の極秘電報をモスクワに打電。 平沼騏一郎首相、「欧州の天地は複雑怪奇なる新情勢を生じ・・・」との声明を発表して退陣。 ・バルシャガル高地の歩兵第64連隊と野戦重砲第13連隊、ノモンハンに向けて撤退を開始。 ・ソ連軍に包囲された第23師団司令部を援護するため、航空隊、爆撃を実施。 小松原部隊に対し脱出帰還命令。歩兵第71連隊、72連隊、前線から離脱。 ・関東軍に、作戦終結に関する大命（大陸命第343号）が下る。 ・阿部信行内閣成立。 ・この時期、制空権はソ連側に移りつつあったものの、苦境に陥っている地上部隊を支援するために、航空部隊の奮闘が続いた。しかし、日本軍の作戦可能な航空機の数、160機を頂点に漸減していたうえ、連日の出撃によりパイロットの疲労は極限に達し、カルピスしか呑めない状態になっていた。また、補給も滞りがちであった。
	9月1日 3日 7日 8日 9日 11日 14日 15日 16日 17日	<ul style="list-style-type: none"> ・ドイツ軍、ポーランドに侵攻。航空隊、ソ連機188機と1時間にわたり交戦。 ・英仏、ドイツに宣戦布告（第二次世界大戦勃発） 参謀本部、関東軍に対し、作戦の完全中止と兵力の戦場外地域への退却（大陸命第349号）を命じる。 ・植田関東軍司令官、磯谷参謀長等の関東軍首脳が更迭される。後任の司令官には、梅津美治郎中将が任命された。 ・歩兵第16連隊（宮崎繁三郎大佐）、997高地、秋山高地、東山高地を攻略。 ・モスクワにおいて、東郷茂徳大使とモロトフ外務人民委員の間で、停戦協議始まる。 ・独立守備歩兵第16大隊（深野時之助中佐指揮）、1031高地（「三角山」、ソ連側呼称「マナ山」）を攻略。 ・飛行集団、戦闘機、軽爆撃機にて、ソ連の飛行場を攻撃し、交戦となる。 ・停戦前に、ソ連航空基地群を爆撃（第11戦隊の撃墜王・島田健二大尉戦死）。 ・ノモンハン停戦協定に調印。 ・ソ連、ドイツとの密約に基づき、ポーランドに侵攻。

(出所) 各種資料より筆者作成。

9月14日付 暗号電報 (原文の一部)

**ШИФРОВКА № 25743/25744/25745/25746/
25747/25748/25749/25750/**

ШЕПЕННО СЕКРЕТНО Экз. № 3 **Подлежит возврату через 6 суток**
КОПИЯ ВОСПРЕЩАЕТСЯ в 4 отделение 8 отдела Генштаба РККА

Контрелем
на дом
г) восп

Подана 13.9.39. 22.20 Принята 13.9.23.03
14.9.39. 2.00.

Код в ШО НКВД 3612

Экземпляр № 15.9.1939

Экз. № 1-4

Тема: **ВОРОШИЛОВУ.**

Суммируя многочисленные данные о военной обстановке на границе с МАНЧЖОУ-ГО можно считать установленным, что японцы решили все чтобы то им стало добиться реванша за недавний разгром и готовят ближайшем времени большое наступление против АР с решительной целью ее уничтожения. Им в основном уже сосредоточены не менее 4-5 пд. вторая пд, четвертая пд, пополняются и восстанавливаются 23 пд и 7 пд есть требующие уточнения сведения о переброске 9 пд, крупного соединения из Кореи и кабригады, также новых маньчжурских войск. Сосредотачиваются также многочисленные части усиления и специальные части, очень много артиллерии (по данным Харбина якобы до тысячи разных орудий), танки (прошло 10.9. 150 из Хайлара и т.д.), и вся авиация какур могут собрать (считая до 500 самолетов). Это сосредоточение идет главным образом за счет весьма существенного ослабления японских войск против 1,2 армий и ЗАВВО.

Если не будет принято других более кординальных решений

Расшифровал „ (прод. 493 2-м листе) час. мин.

ОТПЕЧАТАНО в _____ экземплярах

Экз. № 5—
Экз. № 6—
Экз. № 7—
Экз. № 8—

*3826
9
3*

*Министр
Министр
Министр
Министр
Министр*

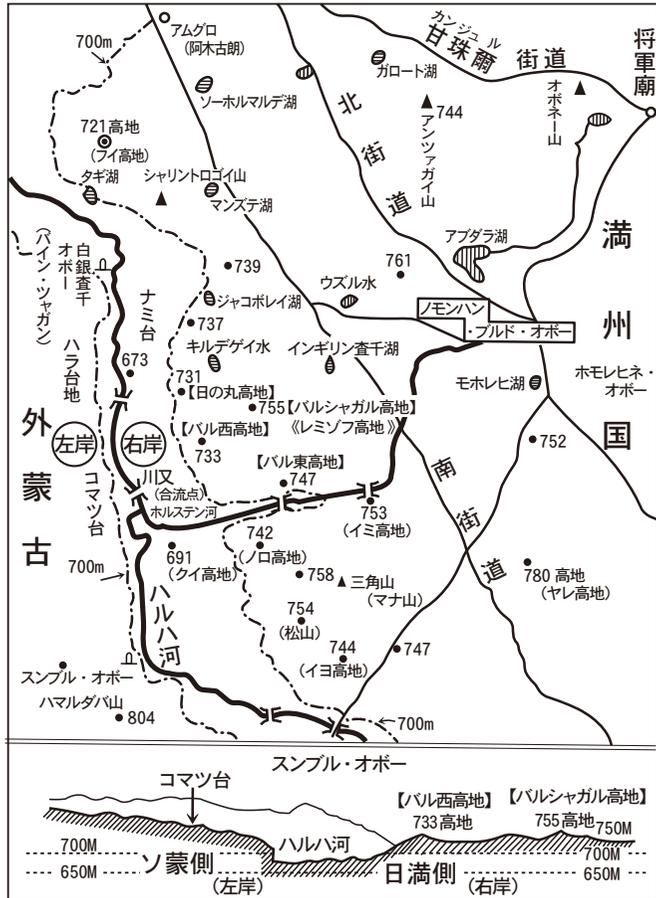
16.9.39

*2589
16/9 39*



図1
ノモンハンの位置

図2
ノモンハン戦場要図



(注) 図2の中の752などの数字は、その場所の高さ(メートル)を示す。
(出所) 筆者作成。